

妻劉慶理の一生

頼永祥



*頼劉慶理告別感謝礼拝は 2011 年 11 月 19 日ボストン台湾基督教会であつた

妻劉慶理（英文名 **Helen Lai**）は台南のクリスチャンの名門劉家の出身で、

1923年10月30日台南で劉青雲夫妻の長女として生まれた。父は慶応大学から理財学士を授与されており、慶理という名は慶応と理財学士から一字ずつ取っていた。母本目貞の家柄は直参の旗本だった。

日本統治下の台湾の教育制度は日本人向けと台湾人向けとに分かれていた。慶理の両親は日本人向けの学校を慶理のために選んだが、そのため台湾籍の同級生は非常に少なかった。1930年4月花園幼稚園に入園した時には台湾籍同級生はただ一人、花園小学校では二人、台南州立第一高等女学校では7名だった。



南一女第20届台籍同學。前排左起：劉慶理、鄭泌香、梁華；
後排左起：劉美惠、薛淑真、陳素姬、劉荔、洪秋惠。

小学校5、6年生の時、慶理はマーガレット M. ゴールド牧師夫人（1867-

1960）からピアノを習った。お嬢さんのグretaさんが当時台南の新樓病院で看護婦長を勤めており、同夫人が台南に同居していたのでまたともない機会だった。慶理はベルリンから仕入れられたスタインベルグ・ピアノを伴として練習に励んだ。



坐者為吳威廉牧師娘；後排左起劉秀華、吳阿玉、劉慶理。

1935年2月10日、慶理は台南メソジスト教会の井上太一牧師から洗礼をうけた。

1940年4月慶理は青山学院女子専門部に入学した。母親の母校でキリスト教大学として知られていた同校では聖書は必修科目、アメリカ帰りの左近孝枝教授(1906－1977)が担当していた。家政学専攻の慶理は専門科目の家庭経済、裁縫、割烹(料理)など以外にも日本文学、倫理学、論理学、心理学、生理学、生物学、音楽などを習った。本来この課程は3年だったが、戦時で2年半に短縮されたので1942年(昭和17年)9月に卒業した。翌年3月には師範学校、中学校、高等女学校の教員資格の免許状が授与された。



学業を終えて台湾に帰り、台湾語を話すのに、慶理は祖母王環治から手ほどきを受けた。帰台後、慶理は一時台南気象観測所に勤めた。

1945年3月1日、台南市はアメリカ機の空襲に襲われ多大な被害を受けた。両親は新市三舎の零細農家から部屋を借りてそこに疎開をし、慶理は祖母の弟に当たる大叔父の山区南化にあった家に託された。当時未だ幼かった四弟備世もそこにおかれ、母の求めに従って慶理が身の回りの世話をした。家族が台南の家で再び一緒になれたのは戦争が終わってからだった。

「慶理は戦時日本で大東亜文学賞次賞をうけた庄司總一の小説『陳夫人』のヒロインのモデルだった、日本人がキリスト教徒の台湾人の大家族に嫁入りして生まれた女の子だ。この美しく、知識に富んだ、自己の見解をはっきりと表現できる素晴らしい女性は、王育徳の自叙伝に、名前こそ変えられているが、著者の若い時の熱情に満ちた言葉で写されている。戦火が台湾に波及してきた時のことだった。愛情の虜になっていた王育徳は無性にあの気象観測所で働いている女性に会いたくなくなってしまった。嘉義から山や嶺を超えて、彼女の疎開先南化山区にたどり着き、彼女を探し求める。しかし信仰が同じでないということで、失恋の苦汁をなめなければならなかった。」(王貞文による)

戦後、中森幾之進牧師のご紹介をうけ、楊基銓夫婦（夫人は慶理の父方の5番目の叔母に当たる）を仲人として慶理と永祥は1946年12月26日に挙式

をした。式は当時台北市のほぼ中心にあった中山基督長老教会で行われ、ダンカン・マックレオド牧師が主持して下さった。



結婚後夫婦は手を取りあつて **65** 年近い歳月を共に歩み、「日に日に愛情が深まっていく」ことを経験した。妻慶理は知恵に満ち、徳を修めた女性で、全心全意すべてを神に祝福された家庭を作るのに捧げてくれた。純朴、懇懇、善良な一生で、懇切に客を迎え、同情心を持って人に接した。困っている人がいれば、財布の紐をとくのに躊躇をせず、人を助けるのを喜びとしていた。個人的な趣味は古典音楽、読書、絵画や園芸などで、日本のテレビも晩年にはよく見た。故郷台湾や日本の風景を懐かしみ、ノールエー、北欧、西ヨーロッパ諸国、地中海、アメリカ国内やカナダへの旅を楽しんだ。しかし特に忘れられないのは紀元 **2000** 年の聖地への旅だった。

慶理はその一生を通して熱烈に主を愛していた。学生時代には内村鑑三の無教会主義に心酔していたこともあつたが、教会自体を離れることはなかつた。戦後のある一時「召会」という派生的な宗教運動に熱意を示したこともあつた。しかしアメリカに来てからはボストン台湾基督教会の会員となり、一途に信仰とそれによって結ばれた教会員との交流を楽しんだ。朝夕欠かさず聖書を読み、日本語の聖書を使い、賛美歌を歌った。お祈りも常にした。随分前から夫婦は一緒に聖書を一章ずつ読みあげるのを習慣とし、一日に旧約を一章、新約

を一章という日課を続けていた。高橋三郎の著作集や「いのちの水」もそういう時に読まれた。晩年慶理は耳が遠くなり、夫の読むのを聴くのが困難になったので、彼女が読み、夫が聴くことにした。今年の 9 月彼女が最後に読んだのは黙示録の 21 章だった。

夫頼永祥は東京帝国大学出身、戦後台湾に帰り、私立延平学院講師、台湾大学図書館閲覧部主任、台湾大学文学部図書館学科教授兼主任などを経て、1972 年にアメリカに移住し、ハーバード大学のハーバード燕京図書館の副館長となり、1996 年にそこから退任した。夫は台湾にいた時は台北和平基督長老教会の長老で、ボストン台湾基督教会でも長老を勤め、現在はその名誉長老となっている。

夫は書籍に没頭する所謂「本の虫」で、日常の一切は大小問わず妻任せ、細かいところまで手が届く彼女の奉仕に頼っていた。ここ数年来夫の眼力が衰え、運転できなくなると、ドライブも彼女の仕事となった。このように一生を通じて献身的に手助けをしてくれた妻を持ったことは、神のみ恵みであり、最高の愛のしるしだと思う。

夫婦は三人の子供に恵まれた。長女頼真理、長男頼嘉成、次男頼嘉徳はそれぞれ台湾で大学を終えた後、アメリカに来た。三人とも家を成し、それぞれの職場で活躍している。長女と婿の John Olsen と孫娘の李晶は マサチューセッツ州 Winchester に、長男と嫁の林麗敏とその長男正恩は同州 Andover に、次男と嫁の林婉玲と二人の男児、皓威と皓然の一家は同州 Lexington に住んでいる。

2011年10月3日慶理が倒れ、骨折があった。病院での手術は順調に進んだが、身体が衰弱していた上に、心臓も弱く、肺に水がたまり、呼吸困難となり、臨終を覚悟せよという宣告をうけた。しかし恵み深い神は、私たちの祈りを聴きいれ、奇跡的に危機は一度去った。10月29日にはリハビリテーション病院で家族が彼女の米寿のお祝いを催すことができるほど回復が進んでいた。彼女が楽しげに皆と歓談していた姿がすぐ臉に浮かんでくる。彼女がその同じ病院で11月5日に、安らかに永眠することは誰も予想していなかった。

